

格納庫の周辺はいたるところ墓地となっていた。やがて、このままでは越冬は不可能で、全員死ぬほかはないと、避難南下することになり、貨車で出発した。貨車の中でも死ぬ人が多く、貨車の止まった時、線路の脇に置き捨てるように土をかけてやることも出来ず、肉親の泣き声だけが木霊し、私達も貰い泣きが毎日続いた。

ハルピンで貨車がとまると、ソ連兵に引き降ろされる奥さんを助ける主人が共に銃殺されてしまった。何人も人が無差別に殺され、ホーム内の防空壕は死人の山となった。

治安が悪く、下車することも出来ず、新京の会社の社宅に入れてもらうまで生きた心地がしなかった。

それから七か月間、母と子が生きるため、飴売り、満人の子守、家事手伝いなど、どんなこともしなければならなかった。

さいわいにも義父が憲兵で、満人を良く世話をし、その恩を忘れずに食べ物や衣服をもつて来てくれ、「日本に帰るまで頑張るよう」励ましてくれ、何よりも心

強く私と息子が今日あるのもこの満人のおかげと感謝している。佳木斯を出る時、七歳以下の子供は百二十人いたのが、帰国出来たのは只の二人と聞く。りつ然としました。さいわいにも私達二人は、二十一年七月、無蓋車に乗せられ、皆で、かばいあいながら錦州に到着し、何日か船待ちをし、コロ島より博多港につき祖国日本に帰ることが出来ました。やがて主人も復員し、農業をしながら生活再建のため働き続けました。今思い出すことも口にすることも嫌で嫌でなりません。再びこのようなことが、あつてはなりません。現地で生きるため、満人の奥さんになられた方、親の手を離し、行方不明となった孤児の方々が一日も早く肉親に再会出来ることを心から願ってやみません。

満州開拓団の末路

岐阜県 玉田 澄子

今年も八月九日が巡ってきた。当時七歳だった私に

とって、昭和二十年のあの日が太平洋戦争の終結であり、苦難の逃避のはじまりでもあった。

ソ満国境の低い山なみの上に、爆音を響かせて二つの黒点が現われ、見上げているうちに飛行機の形をなしてきて、轟音と共に西の空へ飛び去った。頭上を通り過ぎてから、機体に日の丸がないことに気づき、一緒に見上げていた兄に確かめたが、それがソ連軍の満州侵攻だとは思ひもしなかった。

満州国間島省琿春県和良村分村開拓団の我が家では、母が、四人目の子供を産んだばかりだった。七月二十二日に団長だった父が召集され、心細い日を送っていたが、その朝は無事に妹が生まれ、私と兄は明るい表情で登校の途についていた。学校についてすぐ避難命令を知らされた。しかも、避難列車の通る琿春街へ通じる橋を十二時には焼き落とすというのだ。

婦女子と老人ばかりとなっている開拓団にとって寝耳に水の命令に、対策は二転、三転、琿春橋にたどり着いた時には、すでに橋は黒煙をあげていた。産後の母は、一度は自害を決意したが、牛車を用意してくれ

た近隣の人びとに助けられ、炎天の砂塵の中を祈るような気持ちで駆けつけてきたのだ。

開拓民を遺棄して関東軍が対岸から火を放って退却するなど信じられない事態に一行は呆然として橋のたもとにたたずんだ。

前夜の雨で琿春川は増水していて牛車での渡河は不可能。浅瀬を探して右往左往。母は赤子を背に三歳の妹を抱き、兄と私を叱咤しながら半狂乱の姿で濁流を渡り、川原を歩き、真つ暗な駅の最終避難列車に間に合ったのだ。私はこの最初の逃避行で戦争の恐ろしさを実感した。

敗戦を知ったのは、延吉の学校へ集結して一週間後の八月十七日のこと。日本の活路を開くためと送りこまれた開拓団民はもう国民の対象からはずされていたのかと、悔しかった。

ソ連軍の物取りなどや長年の日本の圧政に対する現地人の報復と敗戦国の民は筆舌に尽くしがたい悲惨な情況に追いこまれていった。

九月になって、学校からの退却命令が出た。栄養失

調や病氣の体で、安住の地を求めて徒歩と野宿の十日余の彷徨の末、開拓地近くまできたが、それ以上は進めなかった。家財や農地、作物の一切が現地人によって奪われ、命まで失うことになるといわれ、敗戦国の民はひたすら恭順の姿勢を示すことによつて命をながらえ、祖国帰還を祈る以外に術はない。

ソ連軍の本国への物資搬送の使役に出てコウリヤンや豆粕を貰い、飢えをしのご。現地人の苦役となつて口すぎをする。

十一月になると、寒波が着のみ着のまま夏着の難民を容赦なく襲い、老人や子供が死体の山をなした。誇張ではない事実である。大地は凍つて、埋葬できない遺体は素っ裸で死体置き場に積みあげて置く。死者の身につけていた麻袋の一枚や口にしていた一掬いのコウリヤン粥が、死者から生きている者への贈り物なのだ。わが家のあの朝生まれの妹は、野宿の末にたどり着いた琿春街で、四十九日の地獄の生を終えて満州の土に還つた。

十二月に入つて解団にも等しい「各自の才覚で生き

よ」という通達があり、子供を手放す親が続出した。母は自分を売つて子供を守ろうとした。現地人の老人が母を後添いに望んだからだ。「子供を頼む」と言つて召集された父に應えるには、その道しか無かつた。肺炎にかかつている兄をすぐ医者にかけてくれること、子供は三人一緒に養育してくれること、祖国引き揚げの時は速やかに帰国にに応じてくれること、この三条件を達えることなく、老人は誠意を尽くしてくれて、母子四人は翌年十月、博多へ引き揚げてきた。

琿春を徒歩で出発してから、コロ島で乗船するまでの五十日の祖国への道も過酷なものであつた。吉林、新京、奉天、錦州の各地で難民暮しを余儀なくされ、飢餓と病気で亡くなる人が多かつた。

▲五族協和による平和理想郷、王道楽土を築こう▼
のキヤッチフレーズで国民を鼓舞させ、その実、満州侵略の野望に燃える関東軍の手先にさせられていた日本の農民の、なんと哀れな末路であらうかと。関東軍では、すでに昭和十九年の段階で北満、東満の放棄を決めていたという。南方戦線に投入した関東軍の主力

の抜けたソ満国境をカムフラージュするために、敗戦の三月前まで、続々と農民は送りこまれていたのだ。

夫は帰らず

長崎県 野田 静子

二十年四月十日、忘れもしません、あのうらめしい赤紙の届いた日でした。主人の母にも、主人にもだまっつて破つてしまおうかとさえ思つたものでした。出征の五月一日はよく晴れた日でした。街路樹のしだれ柳の芽の美しかったこと、あの色が今も目に残っております。

玄関で見送る主人は、母と子供を頼んだよ、とじつと私の目を見つめたまま、さつと足をひる返して出て行きました。「父さん早く帰つて来て」ノド元まで出た言葉が言えませんでした。どうしてあの時に言わなかったと、今だに口惜しく、切なく思い出されてなりません。

「あの時に言い忘れたる大切の」と言われる言葉、それは「父さん早く帰つてきて」の言葉でした。それから早くも三か月は過ぎて、八月十五日、敗戦のお言葉を聞くことになりました。主人は撫順の満鉄の工事に部につとめておりましたので、満人の交際も多く、親しい友人もたくさんおりました。十五日の敗戦の日よりわずかな日数だつたと思います。中国の友人がある日、突然夜おそく訪ねてくれ、「太々^{タイタイ}早く荷物をまとめて、逃げなさい、ここはあぶない」と教えてあたふたと帰つて行きましたので、隣り近所にも知らせてみましたが、皆半信半疑の様子なので、私達だけ逃げるわけにはゆかず、とどまっております。その夕方、現地人の暴動にあい、家ぐるみ、身ぐるみ、丸裸同然で、煉瓦建二階の家族五世帯が身につけていた、わずかな現金だけで、夜のうちに友人、知人の家に頼らねばならなくなつてしまいました。そのみじめさといつたら、たとえようもなく、切ないものでした。二、三日たった、事務所のはからいで、会社の独身寮を開けていただき、その夜はつかれと不安で過ごしました。